

台湾の舞踊教育におけるラバン・ムーブメントシステムの導入と発展に関する研究
—1940年代から1990年代に着目して—

趙 穎 妍・酒向 治子

1. 研究背景および目的

ルドルフ・ラバンの運動形態理論は、20世紀から今日に至るまで、多様な目的によって分岐しながら、世界における舞踊学の礎として発展し続けている。代表的なものとしては、楽譜に擬えて運動の記録を目的として開発された Labanotation, 身体教育現場での実践的な活用を目的として開発された LOD (Language of Dance), 動きの観察・分析を目的とした LBMS (Laban/Bartenieff Movement Studies/System) などが挙げられる。これらは、それぞれ体系化された記号と理論的枠組みを確立しているものの、根幹として人間の動き・時間・空間に関するラバンの考え方を共有しており、総合して「ラバン・ムーブメントシステム」と捉えることができる。

ラバン・ムーブメントシステムにおける最大の特徴は、動き・時空間の理論を記号によって視覚化することにある。オンラインによってグローバルな交流が活性化し続ける今日において、動きを<身体言語>としての共有を可能とするこのシステムは、今後さらに重要度が増すと考えられる。

ラバン・ムーブメントシステムは欧米を拠点に長年発展し続け、さらに南米・東アジアにおいても普及するなど、地域的な広がりも見せている。しかしながら、その急速な発展による拡散的な特徴から、研究史的な観点からみたととき、その流れを追うことが難しいとされてきた。特に東アジアでは、個々人による導入と普及という側面が強く、全体的な推移が見えにくいとされてきた。本研究では、このような状況を背景として、いち早くラバン・ムーブメントシステムを舞踊研究に採り入れた台湾に着目し、特に導入期から転換期(1940年代~1990年代)までの推移を検討する。

2. 主な研究結果

台湾と中国の統合学術プラットフォームを経て入手した文献を検討した結果、(1) 導入期(1940年代~1960年代): 近代舞踊の先駆者劉鳳學(1925-)をはじめとする、台湾へのラバノーテーションが導入された時期、(2) 発展期(1970年代~1980年代): 明確に芸術大学に選択必修科目として位置づけられた時期、(3) 転換期(1990年代~): ラバノーテーションに替わってLBMSに注目が集まるようになった時期、という三つに区分し、それぞれの特徴についての発表を行う。